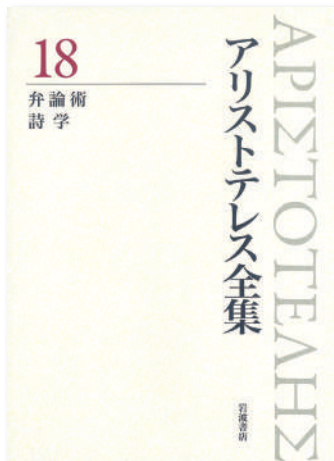


Book List ～沖縄の先生による、今読むべきこの15冊～ Vol.6

県立芸大の
先生が選ぶ
おすすめ本！

入門書でも概説書でもなく、原著に直接アプローチ！ 西洋の美学と芸術理論

選者：喜屋武 盛也 | 沖縄県立芸術大学美術工芸学部准教授、美学



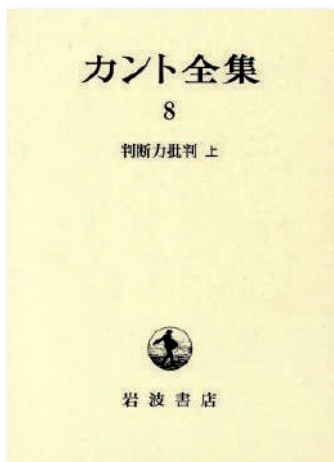
アリストテレス

『弁論術・詩学』(アリストテレス全集第18巻)

堀尾耕一、野津悌、朴一功訳、岩波書店、2017年

/131.4/A76/18

詩学という語は創作術一般のことを指します。現在残されているアリストテレスの『詩学』は主に悲劇について講じた部分ですが、悲劇以外の文学ジャンルについても講じていたようです。喜劇を論じていたはずの『詩学』の後半部は今日伝わっていません(この失われた後半部の存在は、ウンベルト・エーコが巧みに小説で取り上げました)。長く顧みられることのなかった『詩学』はルネサンス以後さかんに紹介されて読まれるようになり、時には厳格な文学の法則と見なされて、これに反するものは認められないほどでした。西洋のレトリック伝統の基底となった『弁論術』と合わせて登場した新訳は、最新の研究に基づく理想的なものです。



カント

『判断力批判(上)』(カント全集8)

牧野英二訳、岩波書店、1999年

/134.2/KA59/8

カントによれば、芸術には天才がいるけれども、科学にはいない。人材不足という意味ではなくて、科学者を指して「天才」と呼ぶのは原理的に不適切であるそう。なぜか。ニュートンの研究した内容は学び取ることが可能で、あとから学んだ人もニュートンと同水準の認識に到達することができる。しかし、ホメロスの詩をいくら学んでも彼の詩作の原理そのものに到達するのは無理な話だ(才能がある者なら触発されて独創的な詩をつくるかもしれないが)。天才とは程度の違いではなくて、そもそも別種存在である——難解を極めるカントの『判断力批判』ですが、例えば、こういう議論の箇所を探して読んでみるのが、接近の糸口になるかもしれません。



ハイデッガー

『芸術作品の根源』

関口浩訳、平凡社、2002年

/701.1/H51/

芸術作品とはいったい何なのでしょう？美しさとか、形とか、描写の正確さとか、作者の表現意図とかそういうものは上っ面のことでしかない、というのがハイデッガーの見立てです。作品と対峙することで眼前に立ち現れてくるのは、物が存在するという事それ自体の、普段は隠された根拠、すなわち「真理」であるとする、美術史も芸術学もすべてすっ飛ばした、ある意味で恐ろしい独特の芸術論が展開されます。近代世界の退嬰を精確に撃ちながら、同時に国民社会主義へもつながる危険な議論。ハイデッガーを通じて芸術作品の謎に至る行程のつもりが、結果的には芸術作品の謎を通じてハイデッガー哲学に至るという、ある種転倒した、不思議な読書体験をどうぞ。



B/131.3/P71/

プラトン 『パイドロス』

藤沢令夫訳、岩波文庫、1978 年

何かを美しいと感じるのはどういうことなのか？—ソクラテスが青年パイドロスとの対話で紡ぎだすのは、魂が遍歴のなかでかつて経験した真実在への記憶と希求。結論の異なる二つの言論を振り返る後半は、言論とは何であるのかを鋭く問うものでもあります。

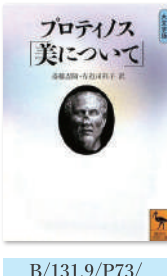


/523.03/V83/

ウィトルーウィウス 『建築書』

森田慶一訳、東海大学出版会、1979 年

ギリシャ神殿のあの特徴的な柱は人体の比例がもとである、と『建築書』は説きます。三つの柱式(オーダー)は、男性、女性、少女の比例に基づくのだそう。ほかにも、星座や音楽、日時計にまで言及した本書は、古典古代の総合知としての建築術を示しています。



B/131.9/P73/

プロティノス 『美について』

斎藤忍雄、左近司祥子訳、講談社学術文庫、2009 年

プラトンは『国家』で詩人を追放する旨の議論をしました。創作に関する最初の透徹した理論家が、創作を敵視したのは皮肉なことです。ルネサンスの芸術家たちがそれを最高の武器に変えることができたのは、プラトンを〈魔改造〉したプロティノスのおかげです。



/704/A41/

アルベルティ 『芸術論』

森雅彦訳、中央公論美術出版、2011 年

『絵画論』や『建築論』などの芸術分野の著述のほかに、例えば『家族論』なども著すなど、まさしく元祖「万能の天才」であるアルベルティ。本書では「彫刻論」をはじめとする彼のいくつかの著作が翻訳され、丁寧な解説が加えられています。



/701.1/B92/

パーク 『崇高と美の観念の起原』

中野好之訳、みすず書房、1999 年

晩年のフランス革命論とともに保守主義の源流としての認知が高まっているパークですが、20 代で書いたこの崇高論もたいへん重要な書物です。単なる「美」には回収できない、恐怖と敬意が入り混じった独特の感覚的心情を「崇高」として定式化しました。



/080/SE22/

『ヘルダー ゲーテ』(世界の名著 続7)

戸張正実編訳、小栗浩、七字慶紀訳、中央公論社、1975 年

文豪ゲーテはさまざまな芸術論も残していますが、「ドイツの建築」など主要なもののほとんどがこの一冊に収められています。また、ゲーテの兄貴分に当たるヘルダーの、触覚を基軸とした造形論、「彫塑」が収められているという何ともお得な一冊です。



/701.1/SC8/

シラー 『美学芸術論集』

石原達二訳、富山房、1977 年

「カリ阿斯書簡」、「人間の美的教育について」、「素朴文芸と情感文芸について」というシラーの三つの著作を収録。1790 年代初頭にカント研究に取り組んだ成果から、美とは現象における自由であるとするシラーの高い理想を感じることができます。



/701.3/R88/

ラスキン 『芸術経済論』

宇井丑之助、宇井邦夫、仙道弘生訳、佐々木雅幸序文、水曜社、2020 年

19 世紀英国を代表する美術批評家ラスキンの著作に新訳が登場しました。二つの講演(「芸術の発見と適用」、「芸術の蓄積と分配」)が収録されています。大著『近代画家論』で画家ターナーを擁護したラスキンが、芸術と経済をめぐる難問に投じた一石。



/933.6/MO78/

モリス 『ユートピアだより』

川端康雄訳、晶文社、2003 年

工芸運動の指導者、デザイナーとしても知られるモリスは、ラスキンの影響下で社会主義的理想と芸術を結びつけました。本書はモリスの描く未来のユートピアの世界。22 世紀は着々と近づきますが、喜びとしての労働にいそしめる日は来るのでしょうか。



B/134.9/N71/2

ニーチェ 『悲劇の誕生』(ニーチェ全集 2)

塩谷竹男訳、ちくま学芸文庫、1993 年

作曲家ワーグナーと親交を結び作曲もしていた気鋭の西洋古典文献学者ニーチェによる、音楽の精神からのギリシャ悲劇論。実証的な学問の世界と袂を分かつ結果となり、また後にワーグナーとも絶縁することとなりますが、哲学者ニーチェの誕生を告げる著作です。

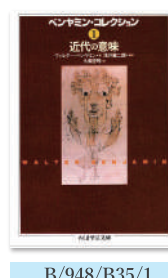


/629.1/Sa53/

フォン・ザーリッシュ 『森林美学』

小池孝良、清水裕子、伊藤太一、芝正己、伊藤精昭監訳、海青社、2018 年

林学者フォン・ザーリッシュが著した経営林の美をめぐる著作が邦訳されました。美学者が注目してこなかったこの書は、森林監督官ならではの森林の美への眼差し、またそれを作り出す知識と技術の数々が述べられており、自然を見る新たな観点を与えてくれます。



B/948/B35/1

ベンヤミン 『ベンヤミン・コレクション 1 近代の意味』

浅井健二郎編訳、久保哲司訳、ちくま学芸文庫、1995 年

20 世紀ドイツの批評家、ベンヤミンの論文集。美学、芸術論として言及され続ける「複製技術時代の芸術作品」をはじめ、ゲーテ論、言語論、歴史論、パリ論があり、さらに「写真小史」も収録されて、驚くほど多彩な世界を一冊で気軽に見渡すことができます。